



Title	18世紀初頭の女性論 : Marivaux journalisteの場合
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 1971, 24, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80395
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

18 世紀 初 頭 の 女 性 論

——Marivaux journaliste の場合

赤 木 富 美 子

Le sentiment sur les femmes et l'éducation des filles chez Mairvaux

Fumiko Akagi

Des femmes, Madame de Lambert a exprimé une nouvelle idée de son époque, sans se révolter toutefois contre la tradition du 17^e siècle; elle a admis qu'à la différence des hommes, les femmes sont plus douées du sentiment que de la raison, mais elle a affirmé qu'elles auraient pu être supérieures aux hommes à cause de cette différence même, si leur éducation avait été bien faite.

Nos études précédentes sur cette dame nous permettent de penser que cette idée nouvelle avait des sympathisants à la fin du 17^e siècle et surtout au début du 18^e siècle. Ce que nous nous proposons d'essayer maintenant, c'est de poursuivre cette idée parmi les esprits excellents du siècle des Lumières, en supposant un cours qui, partant de la fin du siècle précédent, ne cesse pas de se développer pendant le 18^e siècle.

Après nos investigations sur quelques grands hommes du siècle nous avons choisi Marivaux dans cet essai et examiné ses opinions publiées dans les journaux. Ces textes nous donnent un avantage parce que nous pourrions y voir le sentiment de Marivaux plus direct que dans ses oeuvres dramatiques et en même temps ils nous permettent d'entrevoir la réalité de l'époque.

Nous avons constaté que le sentiment sur les femmes de Marivaux a beaucoup de ressemblance avec celui de M^{me} de Lambert.

Tout d'abord, il définit partout les femmes comme naturellement coquettes et qui veulent toujours plaire.

Il dit encore comme M^{me} de Lambert que l'éducation traditionnelle ne peuvent rien pour corriger ce caractère, qu' au contraire, la contrainte mène souvent au mauvais effet.

En appréciant la qualité de sentir chez les femmes, il propose comme le meilleur moyen de les conduire bien, de leur laisser la liberté en se confiant en leur sentiment et de donner toutefois les sages conseils par la mère ou par une amie âgée, quand cela est nécessaire, mais toujours en qualité de leur amie. C'était là une vraie éducation des filles. Ces conseils aux filles donnés par les femmes âgées nous rappelle aussi l'avis de M^{me} de Lambert à sa fille.

Ainsi, nous avons pu admettre une ressemblance remarquable entre cette dame, maîtresse fameuse d'un salon sérieux et cet esprit qui montre bien des conceptions sur les coeurs

féminins. Nous pourrions y ajouter le fait que Marivaux était un habitué du salon de Mme de Lambert.

先に、18世紀初頭の女性論の変化と発展という観点から、Mme de Lambertの、「娘に与える母の意見」などの著書を検討して⁽¹⁾、興味ある二、三の点に注目した。例えば、女性を従属的な存在としている伝統的女性論に、正面から反対するのでなく、女の一生が、「気に入られること。」⁽²⁾に運命づけられていると認めながらも、それをこえた生き方も可能だと主張した点、また女性が本来、理性よりも感性に恵まれた存在であることを肯定した上で、それに加えて理性を培うことが許されるなら、男性以上にすぐれた存在になり得るという可能性を強く示唆した点などがそれである。その後、彼女が理想の女性としてあげたMme de La Sablièreの生涯を調査し⁽³⁾、17世紀から18世紀に受けつがれ、発展して行った一つの考え方の跡をたどってみようとした。その結果、Mme de Lambertのような主張は、18世紀初頭に活動した、ある知的グループに共通の女性観として考えられるのではないかという仮定へ導かれた。

今回は、この仮定を確証してゆくための一歩として、Marivauxの女性観をとりあげたが、一見してMarivauxとMme de Lambertの考え方の間には大きな類似が認められる。この小論は、この印象をtexteにあたって確認してみるためのものである。

大きな類似というのは、例えば、Mme de Lambertの「娘に与える母の意見」が示すように、母が親権者としてでなく、mondeに生きる一人の友達、一人の先輩として、この危険な海の渡り方を助言するという形が、やがて理想的な母娘のあり方として、Marivauxの*La Mère confidente*の主題となるといった点である。もちろん、「娘に与える母の意見」の刊行は1728年、*La Mère confidente*の上演は、1735年で、Mme de Lambertの著書が、劇に直接影響をあたえたとはいえない。この劇は同じMarivauxの*L'Ecole des Mères*と対をなすもので、共にDancourtの“Parisienne”から想を得てつくられたという研究が発表されており⁽⁴⁾、さらに、Deloffreによれば、母が娘の友人という資格を得ようとする着想は、1732年出版されたMme de Méheustの小説、*l'Histoire d'Emilie*の中に見出されるという⁽⁵⁾。この様に*La Mère confidente*が、Mme de Lambertの書物からヒントを得たという証明はないが、MarivauxがMme de Lambertのサロンの常連であった⁽⁶⁾ことを思うと、お互に、こうした母娘のあり方について意見をのべあったこともあっただろうという推測は、許されてよいと思う。*La Mère confidente*が非常に大きな人気を拍し、それは“伝統的意見に逆った”ものだったからだという当時の人の批評⁽⁷⁾を考え合わせると、この類似は、18世紀の女性観の変化や、さまざまな流れを調べるという、われわれの主題にとって貴重なものに思われる。

さてこの様な印象を手がかりとして、Marivauxの女性観を検討し、先にMme de Lambertの著書に見出されたような面白い注目が出来るかどうか見てみよう。

*

Marivaux 劇の女主人公達は、17世紀とは全く異った新しい世紀のフランス女性のタイプとして、独自の存在であり、その綿密な検討が、われわれの問題に大きな光明を与えてくれることは疑いないのだが、劇という昇華された形で女性観の検討に入る前に、こゝでは資料として、Marivaux が *Mercure* や彼自身の新聞に発表した文のみを用いたい⁽⁸⁾。

Mme Duryがすでに指摘されたように⁽⁹⁾、journaliste としての Marivaux は、わずかな研究者以外、気にとめるものもないけれど、彼の才能の非常に面白い一面を示すものである。これらの記事は、読者からの手紙の形式であったり、筆者の毒舌であったり、時には詩であったり、様式は変化に富みながらも、いつも時代の観察者、批判者、教訓家としての Marivaux の意見をうち出している点で、われわれの間に、明瞭に答えてくれる材料だと思われる。もちろん、作品によって一例えば、1717—20年に *Mercure* にのった記事は、とくに観察者 Marivaux の面を、1722年—2年3—24年と現われた彼の新聞 *Spectateur français* は、より多く教訓家としての面を示している—といった違いはあるけれども、女性観については、それほど大きな変化は見られないので、任意に引用例証させて頂く。

*

Mme de Lambert が、女性の能力は男性と同じであると主張せず、両者の間の能力の区別をはっきりと認めた上で、それぞれの特徴を対等なものとして論じようとしたことに、われわれは注目したが、Marivaux もこの点、両者の間に、社会的のみならず、本来的、自然的な区別を設定している。(もっとも Pascal のように、自然とは、第一の習慣ではないのかという理論を適用すれば、この自然的という言葉も、あいまいになってくるが。)⁽¹⁰⁾ たえば、*Spectateur français* の 24^e feuille に、孤児になった姉弟の物語が出て来る。その中で姉が「私の年頃で財産ももない娘は、この世間で何になることが出来ましょう。どちらを向けばいいのでしょうか。どこに避難所がありましょう。でもお前については、全然ちがいます。お前にとっては、ちゃんとした道がいつもあるのです」⁽¹¹⁾ という言葉は、社会的な両者の立場の相違をはっきりと示している。また 4^e feuille にも、長い訴訟と貧困に苦しむ母娘の物語がのせられている。⁽¹²⁾ 事実、保護者のない女性の困難な立場は、Marivaux が、物語の中で好んで描くものの一つである。この社会的相違という大きな現実、Marivaux の女性観において、認識の根底をなしていたと思われる。さらに Marivaux は、この相違を本来的なものとして捉え、「女性は、われわれよりも、より弱き性である」⁽¹³⁾ から云々と言っている。弱き性である女性が、保護者もなく社会に生きてゆくための、どんな才能が可能だろうか。この問題は、彼の大作、*La Vie de Marianne* の主題となるものである。

さて、自然がつくったのであれ、社会がつくったのであれ、このような地位の中で、18世紀の女性は、彼の目にどのように映ったのか。とりあげた資料で、特に注目に価するのは、Marivaux

が、こゝでは、抽象的に女性を想定するのみでなく、現実を具体的に捉えるジャーナリストとして、綿密に、各階級毎に、女達を観察していることである。そこでまず、当時の女性像を、Marivauxの目に映ったまゝ、略述してみよう。

はじめに民衆の女は、その口汚なさで特徴づけられている。「民衆は、Parisでは、あらゆる悪徳の中に生きており、喧嘩でそれを罵りあう。女達は女同志、自分の汚辱の生活を恥じることとはしない。恥となるのは 喧嘩や口論で負けることである。」⁽¹⁴⁾ 夫婦の間でも、たえず罵り合っているのだから、深刻な喧嘩もさほどこたえない。Marivauxはこれを、嵐の海にたとえて、身分の高い人々の静かな海で、舟がわずかな風にもゆらぐのよりよいと言っている。⁽¹⁵⁾

次に市民階級の女性はどうか。Marivaux はこの階級が大変多様であることを認めながらも、あえて語るとすれば、と前おきした上で⁽¹⁶⁾、巧みな機智と世辞で客の財布をはたかせる女商人達の姿を、いきいきと描いたり⁽¹⁷⁾、女性達の著しい墮落をのべて、立派な集りにも、老人から金を得るふしだら女が来ているのにおどろく話をのせている。友人は、おどろいている「私」に、「そんなつまらないことが、不名誉になるなら、こゝの女の人で、避けなくていゝような女は一人もいませんよ。」と答える⁽¹⁸⁾。Marivauxによれば、市民階級とは、民衆と貴族の混成動物で、物腰は貴族の猿まね、その本性は民衆であるという⁽¹⁹⁾。

さて、その貴族女こそ、最もたちの悪いものである。貴族の女を、市民階級の女と比べながら、Marivauxは次のようにのべている。「宮廷の習慣で育って、自分の権利と自由の拡がりを知っている貴族の女性達は、公然の情人を持つことを、少しも恥としない。それは、bourgeois 風に恥じることだというだろう。ではどんなことが恥か。情人がないこと、または失うこと、である。情人達といってもいゝだろう。他処では不名誉なこの複数形が、こゝでは名誉ある行列なのだ」⁽²⁰⁾。では一体どうやってこうした情人共をひきとめておくか、どうやって、つまり、希望をもたせて、なのだ。「普通の、一というのは町や村の女の場合には、放縦から清められて、徳を文字通り保つよう教えこまれた町人風の教育が、情人を大目に見ることを女性に禁じている。もし大目に見たとしたら？その女は罪への一步を踏み出したと云ってよい。実際そこまでゆく前に、だんだん賢明さを減してゆき、何と多くの、羞恥心の働きの無駄に終わってしまったことか。そして情人に希望を与えた、となれば、罪は確定的だ⁽²¹⁾。」ところが、貴族の女は、こんな「心」を持っていない。「結婚していたって、自分に焦れる人を持つことができる。いわば供揃えの一部みたいなものなのだ。貴族の女が男に与える希望といえ、宙にういたでたらめで、定り文句で、宮廷の茶番なのだ」⁽²²⁾。こんな風に、「身分の高い女は、市民階級の女の欠点を全部合せ持っている。たゞ受けた教育と習慣によって、上品に仕上がっているだけなのだ。身分の高い女が、市民階級の女に対してとる、一番よくのみこんだ輕蔑の仕方は、愛想のいゝ言葉や、親切的な扱いだ。身分の高い方って、町寧だわ。と町人女はいう。どんな戦術にかゝっているか知らない気のいゝ女。この町寧さで下賤のすみっこへちゃんとおかれてしまっているのに。」⁽²³⁾ 結局貴族女の優雅さは、「親の虚栄で始められ、他の女の例を見たり、つき合ったりして進んでゆき、本人の

虚栄心がいろいろ学んで、磨きあがったものなのだ。理性ある人間は滑稽と思うが、青年達は魅きつけられるし、民衆には威圧になり、町人女には、いつもまねるがまねの出来ない優雅さ。貴族の女達が、ふみまよってゆく悪の道と、となり合せて、傲慢のつくった傑作だといえよう。」⁽²⁴⁾

こう並べてみると、要するにどの階級の女性も、この時代には、墮落がいちぢるしく、Marivauxの目に余る点が多かったらしいが、これらの資料をもう少し抽象的にまとめてみよう。Marivauxは「女性」をどのように特徴づけているだろうか。

Marivauxの女性観を、これらの資料にあたって調べたところでは、伝統的とも云うべきいろいろの悪口をあげることは、勿論できる。たとえば、*médiance*である。*Spectateur français*には、女性が他の女を巧みにけなす様子が見事に描かれている。⁽²⁵⁾ また虚栄心も注目されていて、虚栄心から好きでもない人間をひきつけておこうとする女性の話⁽²⁶⁾や、美男だという評判だけで、そのtitreのためにその人を愛するようになるものだという⁽²⁷⁾指摘なども見いだされる。しかし、これらの特徴にもまして、Marivauxの注目の中で大きな位置を占め、また興味深いのは、女性の *coquetterie* についてのそれである。

まず、女性の服装についての観察を見ると、「女達は、倦くことなく *coquette* なものであるが、*coquette* でないように思われようとする時ほど、*coquette* なことはない。」と云って、その例に当時流行の *négligé* をひき、「それは *coquetterie* を放棄したように見えるが、実にみせかけだけで、気に入りたい欲望の最高傑作である。」⁽²⁸⁾ ことをいろいろ証明している。*Lettres sur les habitants de Paris* の中では、貴族の女性の中、特に *femmes coquettes* という項を設けて説明している。これは、女性の中の墮落していないものではあるが、「*coquette honoraires* と云うべきもので、情人には、近づくことだけ許して、自分の魅力の証のみを満喫している女性である。」⁽²⁹⁾ とのべ更にもっときびしく、情人をよせつけない女達も、近づく難い美人の中に数えられるのが快いめだとして、そこに彼女達の *coquetterie* があるとのべている。又別のところでも、恋人がないのが恥だというのも、「女性が *coquette* であることを考えれば理解できる」⁽³⁰⁾ と言っている。

このように、列挙してみると、*coquette* でない女性はないかの如くであるが、事実 Marivaux は、「On ne peut être femme sans être coquette」⁽³¹⁾ と明言し、更に詳しくのべているところでは、「女性は、*coquetterie* の感情を持っていて、それは彼女達の魂から立退くことはない。それは爆発の時には烈しく、また時には無関心の中で静かにしているが、しかし常に現存し、常に待ち構えている。それは一言で言えば、女性の魂の永遠の動きであり決して消えることのない聖火である。それ故、女は特に意識してのぞまずとも、いつも気に入りたいと希うものである。自然がこの感情を女性においたのである。」⁽³²⁾ といって «Une femme qui n'est plus coquette, c'est une femme qui a cessé d'être»⁽³³⁾ とまで極言している。

われわれはこゝで、M^{me} de Lambertが、「娘に与える母の意見」の中で、「才能も装いも、なおざりにしてはなりません。何故なら女性は気に入ることに運命づけられているからです。」⁽³⁴⁾ といふ、「気に入るためには、人の心を知らねばなりません。云々。」⁽³⁵⁾ と忠告を展開し

ていたのを思い出す。人の気に入りたいと希うのは、女性の本性であるというこの定義の仕方は Marivaux と Mme de Lambert だけの考ではなく、Fénelon の女子教育論にも、大きな女性の罪悪の一つとしてあげられている。しかし、その本性をどう導くかという点では、おのおのその意見は異っているし、また Marivaux ほど詳しくこの本性を描き出したものはないと思われる、以上の彼の女性観を念頭においた上で、では Marivaux が、こうした本性を持った女性にとって、どういう生き方がのぞましく、そのために、どう導かれるべきだと考えていたかを一べつしてみよう。とりあげた資料を通して見られる Marivaux は、この問題について、非常に大きな関心を持っていたことが、うかがわれるのである。

最初に、伝統的な隔離教育に対する批判が目につく。特にその無効が強調されている点、Molière の *l'Ecole des Femmes* 以来の流れを容易に考えることができる。例えば *Le Spectateur français* の 12^e feuille では、家庭でありながら、厳しい母の許で、まるで修道女のような格好をさせられて過している 16 才の少女の告白として次のような一文がのっている。

「私は将来 coquette な女になるのではないかと、とても心配です。ちらっと見えたりボンにも感動してしまうし、かわいゝ少年が私を見てくれただけで心がときめきます。私は、着飾ったり愛されたり人の気に入るということには、大変な悦楽があるものと思いついてしまっていますので、もし実際持っていたら何とも思わないような、多分つまらないことにこんな風に心をさわがせるようにさせた母を、憎みたくるところです。私がいっと気立ての悪い子だったら、きっと憎んだことでしょう。」⁽³⁷⁾

本当の隔離である修道院さえ何の役にも立たない。*Lettres contenant une aventure* に出て来る一人の婦人は、何も知らない間なら、失うものの価値もわからずいゝだろうと、9 才の時修道院に入れられた。3 年間は別に何の希望もなく過ごしていたが、しかし少しも修道院に向いていないこの心は、まだ何をのぞむというのではないが、「あてのない心のときめきで、自分に適った快い感動が存在することを、見抜いていたようで、そういう快い感動が、自分にも来ることを待っているようだった。」⁽³⁸⁾ そうしたある日、病気の娘を見舞いに来た友達の母が伴っていたその兄に会う。そして忽ち目で語り合う術をさとり、その自分の様子には、「はじめてらしいところさえなかった。」⁽³⁹⁾ と告白している。また、「全く幼かったにも関わらず、男の人に対しては、気分が変りやすいのがいゝということを理解していた。」⁽⁴⁰⁾ といった風に、自然に備わった coquette な本性を、抑えつけても何にもならないという話がのっている。また先に引用した “La Mère confidente” と反対に、母親があまりに圧制的な教育をしたために、かえって娘が反撥してゆく様を描いた話もある。「私は生れつき賢い子です。……信仰についても誓って云いますが、母があれば要求しなければ、もっと信心深くなったでしょうに。ほんとうに、母と生涯一緒に生活してゆかねばならないなら、私は不信心者になってしまうでしょう。」⁽⁴¹⁾ とか「お母さん、あなたが私におさせになったおつとめや、課された束縛のせいで、私が陥っていたあらゆる嫌悪、不平、気の散り方、焦燥…」⁽⁴²⁾ とかいう訴えがのっている。

本性をゆがめた教育、束縛は、かえって危険であると Marivaux が考えていたことは、恋愛に

ついて女性を二つにわけた部分にもうかゞえる。この分類は、*Spectateur français* の 10^e feuille に、散歩で出会った男の話として見出されるが、この男によれば、coquetteで気の散りやすい女に嫉妬するのはまちがいで、賢くて徳高い女の夫こそ用心しなければならないのだそうである。その理由は、「移り気で coquette な女が、気に入ろうとするのは貴方でもなく誰でもない。それは「皆」なのです。集合した「皆」になのです。これが彼女の情人で、彼女が耳をかたむけ、愛するのは、これなのです。貴方にはほんの一瞬しか目をとめてくれない女の心を捉えるなんて、至難のわざですよ。……（これに反して）徳高く賢い女の心は、やさしく服従的で恭々しい情人によって、すぐとらえられます。こういう情熱は全くおだやかで気高く寛大なのでそれ自身徳に似ており、一つの徳は他の徳に簡単になじむからです。…無論彼女は自分に愛することを禁じます。愛を憎んでいるからというより、憎まなければならない、怖れなければならないという信条のためなのです。だから彼女は愛に抗います。しかし抗いつゝも、知らず知らず、冒険の好みの中にひきこまれてゆくのです。」「⁽⁴³⁾」となっている。この分類は別の箇所にも見出される。（一方は）…心が恋愛において、嫌な印象には閉され、快い印象は偶然おこる度に受入れるといったタイプである。結局すべてから、利益を得る心であり、一つの対象に心を動かされたからといって、他のを諦めない。感情からいって好まない人々をも、虚栄心のために引きとめておくのであって、気が向けば、同じ日に何回も、愛に応えることが屢々でさえある。」「⁽⁴⁴⁾」他の方は、「全く反対の性格で、その心はもっと賢く、もっと新鮮で、いつも恋愛を危険と見なして来たりしく、そこに近づくのを恥として来たのである。だが、打ち見たところ、危険は彼女を追跡して来た。そして、いやいや逃れる時は、人はのろのろしているものだから、その危険に罠まれたのだ。彼女は愛している。」「⁽⁴⁵⁾」といった風である。

このように、愛を危険と教えられ、それに近づくまいとする徳高い、初心な心ほど、そこにひきずりこまれやすいのであるから、無知におくのが安全と考える教育ほど逆効果なものはない。むしろ、Marivauxは、このような場合に、世間を知った年上の女性の忠告を、経験の浅い女性を危険から守る、貴重なものとして高く評価している。

相談の相手が、母親であれば理想的で、*La Mère confidente* になるわけであるが、こゝに資料として用いた記事の中にも、恋を打ちあけられて、それを母に告白するという場面が見られる。⁽⁴⁶⁾しかしそれが、容易なことでないのは、*La Mère confidente* でも明瞭で、Marivauxは、それに代るものとして、少し年上の女友達を、しばしば描いている。例えば、*Spectateur français* の 11^e feuille には、「何と多くの娘達が、今日断崖の縁に立っており、そこにおちたとか／＼ぐくわずかな徳の残りが、彼女をひきとめている。だがこんな場合、徳なんて大して役には立たないのだ…。」「⁽⁴⁷⁾」という警告ではじまり、いろいろな娘達の例をあげている中に、Eléonor という少女の話がある。彼女には Mirski という恋人があったが、思いがけぬ障害が起って、結婚出来なくなってしまった。しびれを切らした相手から、「習慣は、われわれが夫婦になるために、証人が要するというが、われわれの心こそ証人ではないか。」「⁽⁴⁸⁾」と云われ、ひどく迷って、

「もう少しで自分の愛に負けるところであった。」⁽⁴⁹⁾ 幸にも彼女は年上の女性によって救われる。それを Marivaux は次のように物語る。「しかし彼女は *confidente* を持っていた。それは Fatime といって、年上の女で、彼女をお守りした人であり、彼女は この人の 思慮深さを何度も経験しており、この人には何も 隠したことがなかった。」⁽⁵⁰⁾ こうして何も 隠さない 打あけ話が出来、杓子定規な束縛でなく、豊かな世間知で導いてゆくことこそ、娘達の幸福を守る母または年上の女友達の資格だと考えていたようである。若い娘に限らない。6ヶ月間恋人と離れていて、いろいろ悩んでいる婦人に、その友である婦人が、自分の経験をおりまぜて忠告している面白い話が、*Lettres contenant une aventure*である。この忠告者は、深刻がる友をからかい笑いとはばしながら、社交界の女らしい一つの生き方を示す。「そんな悩みは、永遠の忠実に対するあんたの魂の捧げものにすぎないのよ。そんなものは何の価値もないわ。忠実さなんて思い切って、なくなるにまかせなさいよ。そんなものを後生大事にしてるのは、とんまだけよ。」⁽⁵¹⁾そして相手が、「あなたの半生の話を、おしまいまで聞かせてよ。力づけられるわ。」というところ、⁽⁵²⁾とまた大笑いするのである。この *Lettres contenant une aventure* は未完なので断言できないが、この婦人も、先の Fatime と同様、人生の裏をよく知り、人の心について、醒めた観察をしている点、Marivaux が、悪い忠告者として描いているのではないことは明らかである。

この享楽的な女性と、M^{me} de Lambert とを、同一視することは荒唐無稽であるが、しかしわれわれはこゝで、「気に入るためには、男の人の心を知らねばなりません。」⁽⁵³⁾ という M^{me} de Lambert の忠告を思い出さずにはいられない。世間というものや、人の心をよく知って見誤らないこと、それが女性に与えられるべき最初の力ではないだろうか。隔離と無知でなく、現実をよく教えられたうえで、よき方向へ導かれるのがよいと、Marivaux の並べてくれた挿話の数々から推察できるのである。例をあげよう、*Le Spectateur français* の 18^e feuille には、女友達とその愛人のいさかきを目のあたり見た老婦人の述懐として、「事実、私に出来のよい娘がいたら、その子に徳の例をいくつも示してみせるより、こうしたことを、一つ見せた方が、ずっとよく育てられると思うのですよ。」⁽⁵⁴⁾と語られている。

では、Marivaux の志していたよき方向とはどこだろうか。それをもっと明確にするには、Marivaux がどんな女性を理想的な女性と考えていたかを、劇の数々や、長篇小説の分析によって調べなければならない。こゝではその予備調査として、はじめに限定した資料だけから、M^{me} de Lambert との比較によって、大雑把な輪郭を掴むだけにとどめたい。

M^{me} de Lambert が、「女性は気に入ることに、運命づけられているのです。」という言葉で現わしたことを、Marivaux は微に入り細に亘って、女性が如何に *coquette* であり、*plaire* ということに、その全力を用いるものであるか、嫌というほど、描いてみせてくれた。女性について言及されているところは、殆んどと言っていいほど、この根本原理が呈出されているといっても過言でない。が Marivaux は、だから女性とは、仕様のないものだと云っているのではない。この資料に現われた Marivaux は、何よりも *moralisateur* であり、諷刺しながら、よりよきものを実現しよ

うとする、Molièreの後継者である。M^{me} de Lambert が、美の支配は長く続くものではないと言って、⁽⁵⁵⁾ 女性の coquetterie を戒めたように、彼もまた、それが如何に女性を滑稽なものにするかを訓そうとしている。*Le Spectateur français* の 18^e feuille にのっている老婦人の覚え書は、その典型的な例である。それは、女性の本性である coquetterie が、どのように癒されてゆくかの、小さな歴史である。

最初の苦い経験は、この婦人の愛人が、その娘に、婦人に会うことを禁じた事実であった。婦人から詰問された愛人は、私は「娘を結婚させようとしている。娘はあなたに影響されて、あなたのように優雅になりたいと希うでしょう。それは結婚前の娘にとって適当でない。」⁽⁵⁶⁾ と手紙で理由をのべる。老婦人は覚え書の中で、「私はこの手紙を、細切れにしてしまいましたが、御覧のように長く記憶に残っています。そしてその時は気づかなかったけれど、これは、私の coquetterie を、ましにしてくれた最初の事件でした。」⁽⁵⁷⁾ と云っている。その次は、女友達が、情人から尊敬もなく扱われているのを見て、「男の人を今までより、つまらないものと思うようになった。そして今までほど、彼等に気に入りたいと思わなくなった。」⁽⁵⁸⁾ ことだという——とはいっても coquetterie は、なかなかおられない。この婦人も、「われわれの馬鹿さ加減の一つは、若やいだ様子が、自分を若くみせてくれると、いゝ年をして考えることである。」と言っている。いくら若い人のまねをしても、そこにはどうしてもちがうものがある。「女達はそれを信じないしこれからも決して信じようとしません。私みたいに、うんと、滑稽なさまをさらけてからでなくてはね。」⁽⁵⁹⁾ —さて、いよいよ、若い人のまねもできない老年に達すると、自分は美しかったという面影の残りに助けられて生きるようになる。「この残ったものに私はまだ自惚れていました。人がそれをどう思うかと気にしていました。馬鹿なことです。そのとおり。でもそれが今お話している一人の女の歴史なのです。われわれは魅力がある時は coquette で、もうそうでない時も coquette なのです。最初の場合は、愛されようとつとめるから。後の場合は、愛されるに価したということを示そうとつとめるから。」⁽⁶⁰⁾ —こうした或日、ある会で婦人は、一人の青年が親切してくれるので嬉しくなっていたところ、その後、青年が恋人に出した手紙を見る機会があった。その中で青年が、「あの古ばけたものをどうしたらいいでしょう。何とかして下さい。あの人は私に恋してもらおうと、躍起です。ほんとですとも。あの女の coquetterie がどんなものか、御存じないのです。あんなしつこいものはありません。云々…。」⁽⁶¹⁾ と書いているのを読み、思い知らされる。その時は悲しいばかりであったが。一ヶ月後、親しい友の死を目の当たりに見て、やっと「世界がすっかり変って見えた。」⁽⁶²⁾ のである。この長い話は、M^{me} de Lambert が、「もうあなたの美しさで、その場所を飾ることができない時には、そこへ行ってはなりません。」⁽⁶³⁾ と言っているのと、同じ発想であり、同じきびしい教訓である。

同じような好み、同じような教えはまだ他にも見られる。恋愛中の女性が如何に理性を失うかを、おとぎ話をきく子供にたとえて、「まだこうした忠告のまに合う女性がたくさんいる。」と言って、「こうした状態に対して怖れを抱いてほしい。それが救いになるから。」と述べ、愛のあとに、どんなに惨めさのみが残るかを説いている。⁽⁶⁴⁾ 混乱や狂気の恋愛に対して、恰度、M^{me} de

Lambertが、説いたような、節度ある、精神的な愛を、説いているところもある。「このような恋愛がどんなものか、よくわかって頂きたい。このような恋愛では、どんなに二人が偉大で気高く、デリケートであるか、また名を惜しみ、それに満足しているか、また、賢明でしようとすることに、どれほど満足があるものか、わかってほしい。というのは、普通そんなことには、悦びはないと皆おもっているから。それは誤解なのだ。徳は、それに費した苦しみに報いてくれる。相手を受するのと同じほど、この徳を受するようになる。徳と相手とはまじり合い一つのものになる。それでそ愛すべきものになると思いませんか。それを受することに喜びがありませんか？その上、このような気高い情熱を持ち、それを相手にも与えるということは、まさに名誉あることではありませんか。あゝ互に愛されるに相応しくなろうとして、互に争って賢明になろうとするのです。」⁽⁶⁵⁾

こゝに詳しく述べられた愛は、Mme de Lambertが、こまごまと述べた異性間の友情論と非常によく似たものである。Marivauxは、どんなに女性をcoquetteなものと定義していても、こうした生き方に到達することを不可能と考えてはいなかったらしい。かえって女性の中に、悪を嫌い、よいものを好む力があるという自然への信頼がはっきりと見られる。*Le Spectateur français*の18^e feuilleに、「徳は実際美しいものです。悪徳は魅力があるけれど、それ以上に或面で醜さを持っているものです。そうですとも、その快楽は無限だと云っても、快楽以上に嫌悪を与えるものなのです。悪徳といゝましたが、一寸した恋心もその一つです。それは精神に混乱をきたし、心の混乱もやがてそれに加わります。この混乱には甘さがあるとしても、その苦さを知っていれば、それを味ってみようという女はありませんよ。」⁽⁶⁶⁾という言葉がのべられているなどがその例である。

ところで最後に、Mme de Lambertとの類似点で、もっとも興味深いのは、女性の感ずる力への信頼である。例をあげると、*Lettres contenant une aventure*の女主人公は、さまざまな困難な立場でうまく立ちまわるのに、こう述べている。「これらの陰謀を、うまく私が処理するのは、機智や巧妙さの力でさえありません。私は決して、熟慮しないのです。私は冗談を云い、私は感じるのです。これが私の才能のすべてなのです。それでもって私は何時でも難局を切り抜けたのです。最もデリケートな措置も、最も巧妙な手だても、思考や努力を少しも必要としないのです。……私は本能によって、いつも適切に、いつもすべてを享樂しながら行動します。このcoquetteであってしかも少しも罰を受けない本能を、私はひとえに次のようなものに負っているのです。すなわち、愛される価値がある女だと感じたいという癒し難い欲望、そのことを私に証してくれるあらゆることに対するつよいつよい好みとに負っていると思うのです。」⁽⁶⁷⁾この生き方の原理を証明するような言葉が、他のところにも、しばしば現われてくる「*Je sentis, je ne sais comment……qu'en pareilles, le plus sûr moyen de……*」⁽⁶⁸⁾ こうした女性のタイプは、Marivauxが、劇や小説で好んで描いたと思われる。

女性が、理性の力で、男性に劣らないものであるという説は、現在までの社会状況や、環境の

せいであるにしても、証明の難しい問題である。だから、理性万能の思想が支配している時代には、多数の人々の頭の中で、女性はあくまでも劣ったもの、せいぜいこれから進化教育されるべきものとしての地位しか獲得することができない。それにひきかえ、人間の感じる力への評価が増し、その才能への信頼が高まるにつれて、女性の評価も高め得る可能性が現われる。M^{me} de Lambertの用いた論理は、まさにそれであって、理性の働きは努力によって開発し、増大することができるが、感じる力は、自然から与えられるより他ないとすれば、女性はその本能としてもっているこの力の上に、理性を合せもつことが、できるなら、必ず男性よりもすぐれた存在の実現を見るというのである。この点で17世紀のhonnêtes gensやprécieusesの感性評価は、M^{me} de Lambertのグループの女性擁護論を大きく支えるものと推測できる。またMarivauxもその一端をになっていると結論できるのである。たゞこのような論拠は、時代の流れにうまくマッチできない欠点を持っていたのではないか。という疑問が残る。もしこのグループの女性論に、大勢を決し得ない欠点があるとしたらそれは何か。時代の流れの中で、それはどんな風に発展してゆくのかは今後に残された問題である。

(註)

- (1) 「18世紀初頭の女性論——M^{me} de Lambertの場合」——(大阪外国語大学学報第18号, 1968所載)
- (2) “……les femmes sont destinées à plaire.” (*Avis d'une mère à sa fille, Oeuvres complètes de madame la marquise de Lambert*, p. 62)
- (3) 「17世紀市民階級の女性——M^{me} de La Sablière」——(大阪外国語大学学報第19号, 1669年所載)
- (4) Lucette Desvignes, “Dancourt, Marivaux et l'Education des filles” (article paru dans la *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1963, pp. 394—414)
- (5) Marivaux, *Théâtre complet*, T. II, p. 219—220
- (6) 「18世紀初頭の女性論——M^{me} de Lambertの場合」p.98
- (7) Marquis d'Argenson — “cependant le public l'a suivie assez longtemps; on aime la morale aujourd'hui quand la morale va contre les préjugés ordinaires” (Marivaux, *Théâtre complet*, T. II, p. 228)
- (8) Textesとして *Journaux et Oeuvres diverses de Marivaux*, Garnier, 1969を使用。
- (9) M. Dury, *Marivaux*, p. 4
- (10) Pascal, *Pensées*, Brunschvicg版93, 94。
- (11) *Le Spectateur*, 24 feuille, *op. cit.*, p. 258
- (12) *ibid.*, p. 128—132
- (13) “elle est d'un sexe plus faible que nous”, *L'Indigent philosophe*, première feuille, *op. cit.*, p. 280
- (14) *Lettres sur les habitants de Paris* (article du *Mercur*) *op. cit.*, p. 11
- (15) *ibid.*, p. 12
- (16) *ibid.*, pp. 14—20
- (17) *ibid.*, p. 16—18
- (18) *ibid.*, p. 18—19
- (19) *ibid.*, p. 14
- (20) *ibid.*, 29
- (21) *ibid.*, 30

- (22) *ibid.*, 31
- (23) *ibid.*, p. 16
- (24) *ibid.*, p. 26—27
- (25) *Le Spectateur français*, 8^e feuille, *op. cit.*, 151—152
- (26) *Lettres contenant une aventure* (article du *Mercur*) *op. cit.*, p. 89
- (27) *Le Spectateur français*, 17^e feuille, *op. cit.* p., 211
- (29) *ibid.*, p. 31
- (30) *ibid.*, p. 30
- (31) *Le Spectateur français*, *op. cit.*, p. 207
- (32) *Lettres sur les habitants de Paris*, *op. cit.*, p. 28
- (33) *ibid.*, p. 28
- (34) *Avis d'une mère à sa fille, Oeuvres complètes de Madame la Marquise de Lambert*, p. 61
- (35) *ibid.*, p. 62
- (36) 「18世紀初頭の女性論——M^{me} de Lambertの場合」, p. 101参照
- (37) *op. cit.*, p. 178
- (38) *op. cit.*, p. 79—80
- (39) *ibid.*, p. 80
- (40) *ibid.*, p. 87
- (41) *Le Spectateur français*, 19^e feuille, *op. cit.*, p. 177
- (42) *ibid.*, p. 177
- (43) *op. cit.*, p. 126
- (44) *Lettres contenant une aventure*, *op. cit.*, p. 90
- (45) *ibid.*, p. 90
- (46) *Le Spectateur français*, 3^e feuille, *op. cit.*, p. 122
- (47) *op. cit.*, p. 166
- (48) *op. cit.*, p. 167
- (49) *op. cit.*, p. 168
- (50) *ibid.*, p. 168
- (51) *op. cit.*, p. 85
- (52) *ibid.*, p. 86
- (53) 註(34)参照
- (54) *op. cit.*, p. 217
- (55) 「18世紀初頭の女性論——M^{me} de Lambertの場合」, p. 103
- (56) *op. cit.*, p. 216
- (57) *ibid.*, p. 216
- (58) *ibid.*, p. 217
- (59) *ibid.*, p. 217
- (60) *ibid.*, p. 220
- (61) *ibid.*, p. 221
- (62) *ibid.*, p. 223
- (63) *Avis d'une mère à sa fille, Oeuvres complètes de Madame la Marquise de Lambert*, p. 141
- (64) *Le Spectateur français*, 19^e feuille, *op. cit.*, p. 219
- (65) *ibid.* 17^e feuille, *op. cit.*, p. 207
- (66) *op. cit.*, p. 217
- (67) *op. cit.*, p. 96
- (68) *op. cit.*, p. 97